



声に聞く

花の姿に仏説を聞く

願通寺 住職
寺川 幽芳



かつて、京都女子大学に勤務していたころの思い出ですが、学生の宗教教育を支援する宗教部の活動の一つとして幾つかの自主ゼミがあり、私も仏教美術のゼミを担当していました。

毎年、「仏像が好き」とか「古いお寺が好き」という学生さんと、ひろく仏像の文化や心について学んだり語り合ったことは、私にとつて忘れられない思い出になっています。

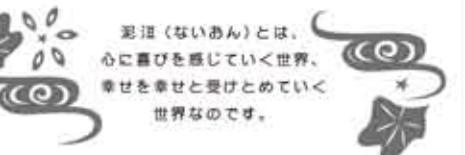
ある時、一人の学生さんが「仏教を花になぞると何の花ですか？」と聞いかけてました。意外な問いに「君たちは、どんな花をイメージするの？」とたずねると、しばらくしていろんな花の名が上がり、やがて「蓮の花」にまとまりました。実は、「花になぞえる」という発想の理解が難しく、その質問の意味を共有するのに時間がかかったのですが、それがあって、皆のイメージを深めてくれました。

蓮はその汚泥のなかからしっかりと根を張り、蓮根が成長しない花は咲きません。そして、蓮は、その汚泥の中から真っ直ぐに花茎を伸ばして美しい花をひらきます。しかも、泥の中からぬきんで花ひらいた花弁には、全く泥は付いていません。

仏教徒は、そこに、四苦八苦に満ち煩悩に溢れた人間世界の泥田に生きる生命を授けられたお釈迦さまが、悟りをひらいて仏陀と成られた事実と重ねあわせて、蓮の花をもって仏陀の座としたのです。しかも、ただそれだけでなく、そこに、仏陀の教えを聞き、

「仏説阿彌陀經」には、阿彌陀仏の浄土に咲く美しい蓮の花は「青い花は青い光を、黄色い花は黄色い光を、赤い花は赤い光を、白い花は白い光を放ち、どれも美しく、香りは高く清らかである」と、どの花も、それぞれ個性を十分に輝かせながら、しかも浄土の花として一つの世界に生きていくと説かれています。

春・四月、満開の桜が花吹雪となつて散り急ぐ姿に「諸行無常」の仏説を聞き、その花の命の行方を「私のこころ」として考えるにふさわしい時機に出合える幸せを大切にしましょう。



育心

「河童」のひとり言

ホツとハウス・in おおの 代表
梅林 厚子



「お前はここの世界に生まれて来るかどうか、よく考えた上で返事をしろ」という短編小説の「節」です。と知られる作家、芥川龍之介さんの「河童」という短編小説の「節」です。とて衝撃的な文章で、今も時々思い出すことがあります。

河童の世界に迷い込んだ人間が、河童の世界のことをいろいろと話してくるのです。

「河童のお産位、可笑しいものはありません。一略、お産をするとなると、父親は電話でもかけるように母親の生殖器に口をつけ「お前はここの世界へ生まれて来るかどうか、よく考えた上で返事をしろ」と大きな声で尋ねるのです。……、尋ねられたお腹の中の子は「僕は生まれたくありません」と、返事をします。その子は自発的に出産を拒否します。

理想郷の表現ではなく、人間界のあ

らゆるものを諷刺している小説だと言われています。

わたしはこの小説を読んで、このように、生まれてくる子どもに選択の権利があるとしたら、この私を親として選んでくれるだろうか？ 選んでもらえるような生き方ができているだろうか？ と問うてしまいました。また私自身もわが母、わが父の子として、生まれることを選んだらどうか？ と思いました。

そして「河童」の世界でなくよかつた胸を撫で下ろしたくなくとも同時に、「河童」たちの言ひ分に對してすべて否定できない気分にもなりました。

明確な答えを出すことなどできま

せん。しかし縁あつてこうして今、目の前にいる愛おしいわが子と、計り知れない条件の中で親子となつたことは事実です。実に不思議な、不思議な不思議な出遇いだと言わざるを得ません。

お腹の中に授けられた時点で、親子の関係が訪れたわけですが、共に新人であり、右も左も分らず、右往左往しながら無我夢中の子育てが始まります。育てているつもりが、子どもの笑顔や寝顔に励まされ、子どもから元気を貰っている自分自身に気づかされたりもします。

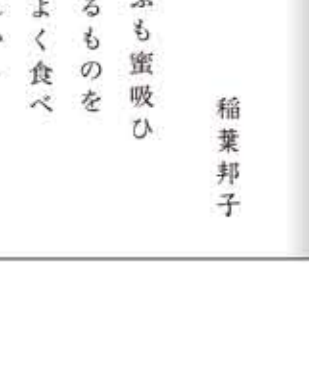
一人で立っていると驚き、歩いたと喜び、どうして分かつてくれないのと涙し、無我夢中の子育ては、少しずつ私を親たらしめてくれていくようです。そんな子どもに「私を親として選んでくれてありがとう」と心の底からこみ上げてきます。

そして、河童はひとり言を発しているかも知れません。

「あなたの子どもは、ほかの誰でもないあなたを選んで生まれたきたのだ。あなたでなければならぬのだ。人間世界の親たちよ、自信を持って生きて欲しい。子どももまた、あなたを見まもつてくれている。」と。

花かごの歌

稲葉 邦子



ふてふも蜜吸ひ
夜は寝るものを
吾子よよく食べ
よく眠れかし

坊や、蝶々さんもストロームみたいなお口でお花の蜜をたくさん吸って、夜になったらおネンネするのよ。坊もたんご飯を食べて、ぐっすり眠って大きくなってね。(蝶は蛾と同じ觸覚目ですが蛾とちがって昼間とび歩き夜は休息)

いのち ほろほろ

第31回
文 中川真昭
絵 徂徠匡男

浅原才市さん①



実母トメさんが往生されたのは、才市さんが十九歳のとき。トメさんは枕元に才市さんをすわらせ、こうおっしゃったのです。「スギさんをだいにしておくれ。わたしの手で、おまえを育てられなかつたのは、ほんとうにすまなかつた。……お寺に参つて、仏法を聞き、お念仏さまをよるこぶ人になつておくれ」と。

才市さんがのちのち「おやのゆいごん なむあみだぶつ」といつていた親は父のことではなく、実の母のことであつた、高木雪雄(鳥根県津津市・浅原家のお手次ぎの涅槃寺前住住)さんがその著「才市同行」才市の生涯とその周縁の人々(永田文真堂)一

九九二年刊)に記していらつしやいます。

才市さんは乳離れのした頃、ある事情があつて、生まれた小田村から小浜のスキという女性に引きとられ、十一歳まで育てられます。スキさんは才市さんの父の四郎(法名西教)さんのいとこで、小さい頃のいのちを助けた恩返しに才市さんを育て上げたとの申し出でした。

才市さんの伝記で伝えられている母トメさんは養母で、したがって父四郎がスキと離婚して云々も、実はまちがいであることも、高木雪雄さんは指摘されています。

二十九歳の時、娘のサキに恵まれます。才市さんは父親としての自覚が深まると、当時の小浜の先輩たちを見

習つて、県外へのお出せきを多めます。大阪や九州へのお出せきが中心だらうな当時、才市さんは、父からのすめと、自分の今の腕が生かされると、九州博多の中州にあつた舟大工の仕事場を決めます。涅槃寺にすつと住みこんでお念仏をよるこぶ日くらしであつた父の助言はこうでした。

「すぐ近くの祇園町に萬行寺さんがある。そこに七里恒順という和上さまがおられるから、しっかりとご教化がいただける。」

その頃、石見地方(鳥根県)の僧侶が、七里和上からご教化をいたたいていたということも、才市さんの背景にはあつたのでしよう。

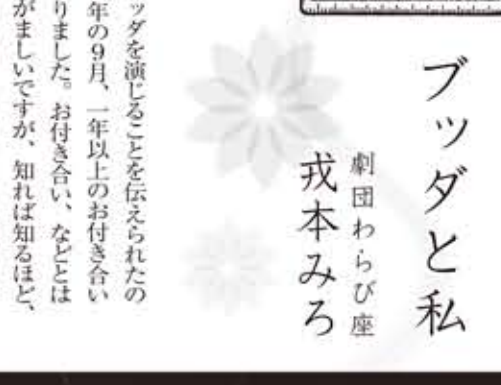
遠近各地から、萬行寺の七里和上のご教化をねがう多くの人々にまじつて才市さんの姿もあつたのです。三十一歳の才市さんに、なにがあつたのでしよう。七里和上が与えられた言葉が残っています。

三十一まで、なにがえうらなうなこころのやうなこころのやうなこころのやうな

ちよはかり
こころのやうな
はからひやめて
南無阿彌陀佛を
いふばかり

私の雑記帖

ブツダと私
戒本みろ



ブツダを演じることを伝えられたのが去年の9月、一年以上のお付き合いとなりまして、お付き合い、などはおこがましいですが、知れば知るほど、生身の人間としてのブツダの喜びや苦衷をあらたに見出し、その懐の深さを強く感じます。そして、私自身の人生を振り返つてみても、多くの出会いのなかにブツダがまたものを感じ、ああ、まさに……ブツダは最初から仏様だつたわけではなく、人として自分の目で沢山のものをみて、誠実に向き合つた山のものなのです。ブツダを演じてゆくの大切なお心根は、私たちが生きる「いま」の中に数多く含まれているのです。

ブツダの実在が実証されたのが1868年、そしてまたその生きた時期が

んな言葉が浮かぶのです。「ブツダは特別な人であつて特別ではない」

確かに、仏教という、いまや世界中で抱け所とされている教えを生み出したこととは、特別ななどという言葉で言い表せません。しかし、人類の歴史のなかで、ブツダのように多くの人々の苦しみを背負い、道を切り開こうとした人は無数にいたと思います。そして現代にも多くのブツダ(の心)が息づいている。長い歴史のなかでは無名であつても、その無数のブツダ達の姿にきつとブツダ自身は涅槃からそうと微笑んでいる。そして、未だ変わらぬ人類的課題に心を痛めているような気がします。ブツダの志を継ぐのは今を生きる私たち。小さな活動からでもいい、手をつないでいきたいですね。

2500年よりも二世紀前だつたかも知れないという説が、最近発表になりました。新事実が発見される度に、私達と同じように呼吸をし、この世を生きていく「人間ブツダ」としての民権を感じます。ブツダは決して民権の上にいる人ではなく、常に隣にいたのだと思います。そして共に考え、共に悲しみ喜ぶ。そうして人々の心に身を添わせたことが、現在の仏の道、つまり仏教という大きな教えにつながっているのではないかと、そう思うと、こ



生きていく心
千世敬愛の師匠、生きていく心
たからもの
いわした なつね(五歳)
なつちゃんの
たからものはね
パパと ママと
おにいちゃんと
パパと ジジと
ようちえんの 友だちと
せんせいとね
いっぱい あるねんで

